

山中suplex 個展「地の塩／Salt of the Blood」@LEESAYAの実施

山中suplex(地の塩) プログラム・ディレクター 堤拓也



東京目黒にある新進気鋭のギャラリーLEESAYAにて、山中suplex個展「血の塩／Salt of the Blood」と題し、アーティストの手塩にかけられた、両手で握って受け渡し可能な棒状の道具を扱う展覧会を実施した。ギャラリーという商用空間の特徴を前景化しつつ、先史時代、石器をつくるために振り下ろされた腕と、現代のアーティストが駆使する技術を重ね合わせ、自らの生より長く永続する棒状の人工品の形式性を再考。東京で行う初めての展覧会であったにもかかわらず、数多くの鑑賞者が訪れた。作品をカウンター上で直接手渡すという独特の展示方法が話題となった。

山中suplex “血の塩／Salt of the Blood”

開催期間：2021年8月21日(金)～9月11日(土) | 水曜-土曜：12時-19時 | 日曜：12時-17時

定休日：月・火・祝日

会場：LEESAYA(〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-14-2)

出展作家：前谷開、小笠原周、坂本森海、小宮太郎、本田大起、石黒健一、若林亮、村上美樹(以上、山中suplex)

キュレーター：堤拓也(山中suplexプログラムディレクター)

<展覧会によせて>

新約聖書・マタイによる福音書5章13-16節にある「汝らは地の塩、世の光である(Yee are the salt of the earth. Yee are the light of the world.)」という格言は、塩によってこの社会に味を付け、また腐敗を防ぎ、毒を抜く役割を果たす機能を持ちつつ、神の子のように世を照らし、叡智を資本に人々を導く唯一無二の存在になりなさいというイエスの教えである。本事業ではそのフレーズが示す構造を踏み台にした2つの展覧会を表裏関係のように扱い、前者では立体(塩／機能)を、後者では平面(光／啓蒙)をテーマとし、キリスト教を基礎とした近代・現代美術が内包する2つの美学性・倫理性の相対化を行う。

まず、LEESAYAでは、山中suplex「血の塩／Salt of the Blood」と題し、アーティストの手塩にかけられた、両手で握って受け渡し可能な棒状の道具を展示する。商業ギャラリーという商用空間の特徴を前景化しつつ、先史時代、石器をつくるために振り下ろされた腕と、現代のアーティストが駆使する技術を重ね合わせ、自らの生より長く永続する棒状の人工品の形式性を再考する。つぎに、京都府域展開アートフェスティバル ALTERNATIVE KYOTO@福知山では「余の光／Light of my World」と名付けられた展覧会を起点に、山中suplex以外のアーティストやキュレーターを交え、眼の時間と思念の積層層である絵画(あるいは平面作品)を扱う。聖書に印字された言葉を認識できない者のために添えられたイラストレーション=宗教画を起源に持つ現代のイメージを通し、主観と心象の複数性を顕在化させ、絵画の原理である永遠性について立ち戻る。

全世界共通の異物であるCOVID-19の存在を踏まえ、前者では感染を直接的に喚起するような「血」や「油」、「手」に着目し、芸術という人間の営みの前提である身体性を意識する一方で、後者では非命題的かつ詩的な領域に目を向け、芸術家が担ってきた「我」や「光」といった私的世界の表象物を展示する。

堤拓也(山中suplexプログラムディレクター)



展覧会フライヤー



Photo by Rentaro Hori
Courtesy of LEESAYA



Photo by Rentaro Hori
Courtesy of LEESAYA



Photo by Rentaro Hori
Courtesy of LEESAYA



Photo by Rentaro Hori
Courtesy of LEESAYA



Photo by Rentaro Hori
Courtesy of LEESAYA



Photo by Rentaro Hori
Courtesy of LEESAYA



Photo by Rentaro Hori
Courtesy of LEESAYA



Photo by Rentaro Hori
Courtesy of LEESAYA